



巻き込まれ召喚!? そして私は『神』でした?? 5

α L P H α L I G H T

まはふる
Mahapuru

アルファライト文庫 

カレッツ

剣士をしている冒険者。「青狼のたてがみ」のリーダー。

アイシャ

「青狼のたてがみ」のメンバー。実はタクミに復讐を誓うSランク冒険者「影」。

Characters

イセリュート (井芹悠斗)

SSランク冒険者で、別名「剣聖」。

フェレリナ

エルフの精霊使い。「青狼のたてがみ」の一員。

レーネ

「青狼のたてがみ」のメンバーで、職業は盗賊。

フウカ

女王の御側付きの盾騎士。

エイキ

タクミと一緒に召喚された高校生。職業は勇者。

タクミ

先日定年退職した平凡な男。異世界ではなぜか若返っている。職業は「神」だが、本人はよくわかっていない。

目次

第一章 女王じよおうからの指名依頼 7

第二章 北の都と月下おとに踊るそらめんどくろ双面そらめんどくろ髑どくろ 71

第三章 『勇者』を求めて 143

第四章 『勇者』狂乱きやうらん 224

第一章 女王からの指名依頼

こんにちは。

私は名前を齊木拓未と申します。私事ではありますが、私もついに還暦を迎えることになりました。

平々凡々と暮らしてきて早六十年、こうして定年という人生の大きな節目のひとつに差しかかりました。定年後は、勝手気ままにのんびり暮らしていこうなどと気楽に考えていたのですが……

不測の事態とは、こういう気を抜いたときにこそ得てして起こりやすいのかもしれない。なんの因果か若返り、今では異世界なる未知の地で、驚きの体験の日々を送ることになっていました。

魔王軍と呼ばれる十万もの大軍との戦いを皮切りに、魔物に魔窟に魔将と相次ぐ戦闘。さらに王都では王様暗殺未遂で指名手配され、国教の総本山ではお家騒動に巻き込まれ、果ては国家反逆罪の冤罪で投獄もされました。

急遽二部構成になった続編映画ではないのですから、いくら第二の人生とはいえ、あまりに第一部と変わりすぎるのもいかがなものかと思うのですが。

小市民を自負していた私にとりまして、あまりにあまりな仕打ちです。なんとという神の悪戯——と思いきや、私とその『神』でした。

これでもかと我が身に降り注ぐ特異な物事の数々は、この『神』という立場に由来しているのでしょうか。最近の、神の試練とは、『神』が与える方ではなく、受ける方になっているのですね。寡聞にして知りませんでした。

しかし、意図せずを得た身に余る力ではありますが、それで助けられる者がいるのであれば、差し伸べない手はありません。

つい先日などは、大勢の皆さんの協力により、魔王軍の手に落ちた王都を奪還することもできました。国内で敬遠し合っていた国軍・教会・冒険者ギルドの三者が互いに手を取り合ったのは、実に素晴らしいことかと思えます。ついでに私利私欲に満ちた王様を廃し、清廉潔白な女王様が復位されたことで、この国も良い方向へと進むでしょう。

世情が一段落したところで、私はかねてからの約束通り、冒険者パーティ『青狼のたてがみ』の皆さんと行動をとることにしました。

リーダーのカレッツさん、メンバーのレーネさんにフェレリナさん、新規メンバーのアイシャさん、皆さんいい人ばかりです。そこに、ちょっとした裏事情はあるものの、『剣

聖』井芹くんをサポートに加えた、私を含む総勢六人が、新生『青狼のたてがみ』のメンバーとなります。

こんな中身老年の私が若人に交じって活動するのは気恥ずかしくもありますが、同時にとても嬉しく思います。気のいい仲間たちに囲まれていますと、なにか心まで若返ってくる気がしますね。

そして、今から語る新たな出来事が起こったのは、私が彼らに合流し、しばらく経つてからのことでした——



地道に訓練といくつかの依頼を重ね、冒険者パーティとしてどうにか形になってきたかと思えた頃——いつも通り、冒険者ギルドで次に受ける依頼を吟味しているところに、受付嬢のキャサリーさんからとある案件がもたらされました。

「指名依頼……ですか？ 俺たちに？」

「ええ、そうよ。これね」

受付カウンター越しに差し出されたのは、真新しい一枚の依頼書でした。

カレッツさんが代表して依頼書を受け取り、訝しそうに眺めています。その両隣では、

フェレリナさんとアイシャさんが覗き込み、背の低いレーネさんはカレッツさんの脇の下から首を突っ込んで興味深げな様子ですね。

「……して、^{指名依頼}とはなんなのですか？」

皆さんから数歩離れた位置で、私は隣の井芹くんを肘で突きました。

「一般の依頼は、冒険者ギルドという組織に対してなされるものだ。実際に依頼を受けるのは、ギルドに登録している不特定多数の冒険者のいずれかだな。対して指名依頼は、特定の冒険者に対してなされる。多くは馴染みの冒険者を使いたいという依頼主の意向だが、不用意に依頼内容を公示したくない場合にも用いられるな」

井芹くんが、壁のほうを親指でちょいちょいと示しながら、小声で教えてくれました。

ギルドに寄せられる依頼を書面にして貼り出す掲示板——通称、壁。たしかに、こっそりと解決してもらいたいような依頼でしたら、あそこに貼り出された時点で秘密なものもあったものではありませんかね。

それにしても、わざわざ『青狼のたてがみ』を指名してくるとは、いったいどのような人なのでしょうか。

特定のお得意さまがいると聞いたことはありませんし、『青狼のたてがみ』がSランクパーティーといいますが、その事実は冒険者ギルドの一部と、冒険者のほんの一部にし



か明かされていないはずですが。対外的に『青狼のたてがみ』は平凡なEランク扱いなので、指名されるほどの重要な依頼はなさそうなものですが。

「ええっ!? これって女お——ふがもが!」

なにやら、皆さんが騒がしいですね。

カレッツさんがレーネさんの口元を押さえ、フェレリナさんとアイシャさんが彼女の上半身と下半身をそれぞれ抱えて、私たちの前をダツシユで通りすぎていきました。

井芹くんと揃って、ぽっくんとして眺めていますと——

「ふたりもこっちに!」

カレッツさんからお呼びがかかりましたので、とりあえず隅のテーブル席に移動することにしました。

今日は他に教組の冒険者パーティがギルド内におり、私たちは彼らの注目を集めてしまっているのですが、カレッツさんたちはそれどころではないようです。どうしたのでしょうかね。

総勢六名で丸テーブルを取り囲み、その中央に厳かに依頼書が置かれました。

依頼主の名は——ベアトリー・オブ・カレドサニア。

「……女王様ではないですか」

このカレドサニア王国が国主、その人でした。

「そーなの! なんで女お——ほがむがっ!」

カレッツさんが咄嗟にレーネさんの口を手で塞ぎます。

「しー! だから、大声出すなって! ってか、囁むな!」

ああ、先ほどの流れは、これでしたか。

「気持ちには理解できるけど……騒ぎすぎなのよ、レーネは。周囲に喧伝することはないでしょう?」

「あ痛たた……そうだぞ、レーネ。指名依頼は守秘が前提。冒険者のイロハだろ」

呆れたようにフェレリナさんが嘆息し、カレッツさんは菌型のくつきり残った右手を擦っています。

「そんならい、あたいてもわかつてるって! でもさ、あたいらに女王からの指名依頼だよ? 驚くなどという方が無理でしょ!」

「レーネちゃんのこと、もつともですね。アタシはまだこのパーティに入って日が浅いのですが……こんな依頼が舞い込むとは、どなたか王家に所縁のある方でも?」

普段は物事に動じないアイシャさんでも、戸惑っておられるようですね。

「んなの、ないない! だって、指名依頼自体、初めてなんだから」

「そうね。わたしはエルフだし、リーダーは平民の出、レーネは商家の娘よね……」

「フェレリナのいう通りだよなあ。王都にはまともに行ったこともなければ、王家の人間

と関わりがある者なんて——」

首を傾げたカレッツさんと、ふと目が合いました。

「あ」

続けて、フェレリナさんとレーネさんの視線もこちらに流れます。

「——あ。ああっ！」

「いた——」

指を差さないでください、レーネさん。

我関せずの井芹くんを除いた三人がざわつく中を、アイシャさんだけがきよんととしています。

「あの……タクミさんがなにか……？」

そうでした。この中で、アイシャさんだけは私の事情をまったく知らなかったのですたね。

不意に皆さんが押し黙り、視線だけが私に向けられています。

この件はプライベート——というよりも、内容が内容だけに、私本人に無断で教えることはしないと、暗黙の了解がなされてきたことは知っていました。

私としましても、必要に迫られない限りは黙っていようと思っていたのですが……その迫られているのが今なのかもしれないですね。

ただ、井芹くんからは、初日にアイシャさんに注意しておくようにとの忠告も受けています。

(さて、どうすべきでしょうか……)

ちらりと井芹くんを窺いますと、またもや我関せずといったふうにお茶を啜っていました。判断は任せる、といったところでしょうか。

(そうですね……)

まだ半月程度といいますが、アイシャさんとは同じ冒険者パーティの仲間として過ごしてきた間柄です。

他のメンバーが知っていることを、いつまでも内緒しておくこともないでしょう。私としましても、黙っているのを心苦しく感じはじめていましたから、いい機会なのかもしれませんね。

「……驚かないでくださいね？」

一応、前置きだけはしてから、アイシャさんに打ち明けることにしました。

私がああ救国の三英雄、『勇者』『賢者』『聖女』と時を同じくしてこの世界に召喚された者であること——いわゆる異世界人であることを。

まあ、実際のところ、当時その召喚の儀に女王様はまったく関与していなかったわけですから、厳密には召喚されたことと今回の指名依頼に因果関係はないのですが。

さすがに、女王様と既知きちになった本当の理由——先の王都奪還における、神の使徒しとのことを明かすわけにはいきませんからね。

ただそれでも、私が召喚された事実だけで王家に所縁ゆかりがあるのは明白ですし、今回の指名依頼の件についても納得はしてもらえらるでしょう。

魔王軍との戦闘の詳細はほかしましたが、召喚を経て『青狼のたてがみ』の皆さんと出会い、仲間となる約束をするにいたった一連の出来事までを話し終えたところで——

「あ！ アイシャさん！」

カレットさんの制止とどまも虚しく、顔色を変えたアイシャさんは冒険者ギルドを飛び出していつてしまいました。

仲間にて体のしれない異世界人が交じっていたことによるものか、それともパーティ内でひとり知らなかったという事実からか……どうやら、並々ならぬ衝撃しよげきを与えてしまったようです。アイシャさんには悪いことをしました。

「黙ってたのは皆、共犯なんだからさ。タクミンもあんま気にしないでいいよ。んじゃ、あとはあたいらの出番かな」

「どんな依頼の篤あついパーティでも、人数が集まったらこの程度の諍いさかいはままあることよ。ちよつと行ってくるわね」

フォローのためでしょう、レーネさんとフェレリナさんが、アイシャさんを追いかけて

いきました。

「ありがとうございます。アイシャさんのこと、お願いしますね」

情けないですが、女性陣のことは同性である彼女たちにお任せしましょう。

こんなときに仲間がいるというのは、本当にありがたいものですね。

「で、残る問題はこちらというわけか」

ずつと黙っていた井芹くんが、私にだけ聞こえるような小声で囁ささやいてきました。

皆さんが慌あわただしく席を立った際にテーブルから落ちた依頼書を拾い、手渡されます。

「……ええ、そうなりますね。こちらも心配です」

受け取った依頼書には……

——行方不明となった『勇者』を捜索してほしい——

簡潔かんけつに、そんな文面が綴つづられていました。



冒険者ギルドのラレント支所を飛び出したアイシャ——イリシャは、そのまま近所の雄牛おうれうの角亭つのの二階へと駆け上がり、借りている一室のベッドに飛び込んだ。

枕に顔を埋めて声を殺しながら、幾度も拳こぶしをベッドに叩たたきつける。

(くっそ、ぬかった！なんてこった！)

それほどまでに、つい今しがた聞かされた事實は、イリシヤにとって衝撃的だった。憤怒に焦燥、憎悪や絶望が混ざり合った感情で、思考がめちゃくちゃになりかける。

「――駄目だ、落ち着け。己は『影』。孤絶した暗殺者。自らの感情を殺し、心を鎮めよ」
暗示スキルの効能に近い自己暗示により、どうにか平静を取り戻す。

危うく、ギルド内で暴れ出してしまいそうだったと、今さらながらに肝を冷やした。そうなれば、これまでの苦勞も、これからの目論見もすべて水泡に帰してしまふ。

(まさか、召喚された第四の英雄がいたとはね……)

イリシヤはベッドでごろんと仰向けになり、くすんだ宿屋の天井を見るとはなしに見つめた。

誤算ではあったが、逆に納得できる内容であったことは否めない。正体不明だった獲物の正体が判明したというだけだ。おかげで、これまで疑問や仮定に過ぎなかつた事柄が、一本の線に繋がったともいえる。

事の発端として、王家は王都の危機にあたり、公示通りに召喚の儀を用いて異界より英雄を召喚し、これを退けることに成功した。

しかし、人数は三人ではなく、実は四人目がいた。それが、あの『タクミ』なる人物だ。なぜ、四人目が秘匿されたのか……それはもちろん、目的があつてのはず。

注目すべきは、その後起こった教会の大神官の失脚劇。年々権力を増す教会の――大神官の増長に、王家が手を焼いていたのは公然の秘密として周知の事実。あえて三人だけを英雄と祭り上げることで国民の目を逸らし、裏で四人目を体のいい刺客として仕立てあげていたとしてもおかしくはない。

なにせ、十万もの魔物で構成された魔王軍と相対できるだけの実力に加え、あの暗躍に向く複製スキルだ。

それに、奴が教会の総本山、ファルティマの都を目指していたのも事実。あらゆる点が符合する。

これまで見聞きした情報を精査すると、推測の域は出ないにしろ、おそらく高い確率で王家の筋書きはこうだったはずだ。

魔王軍の王都侵攻を撃退した後、奴はほとぼりが冷めるまで、田舎村のペナントに身を潜めることを命じられた。後々、ファルティマの都で大神官を暗殺、もしくはそれに相当するを行なう予定だった。

しかし、ここで予想外の事態が起こってしまう。

『青狼のたてがみ』という冒険者パーティとの接触だ。これにより、『タクミ』という正体不明の強者の存在が冒険者ギルドに発覚してしまう。

追うギルドと、隠したい王家。

王家により秘密裏に王都へ呼び戻されたタクミを待っていたのは、予期せぬ冒険者ギルドの捜索網。秘匿していたつもりだった王家はさぞ焦っただろうが、国の組織立った綿密な手引きのもと、ギルドの執拗な包囲からタクミを無事に逃亡させることに成功した。

一方、ギルド側は相手が第四の英雄などということは露知らず、その脅威を知るところとなり怖気づき、勧誘のみならず追つ手まで差し向けてしまう。

遺憾ながら、白羽の矢が立ったのが、Sランク冒険者——この『影』というわけだ。

相手のバックに王家がいるとなれば、あの夜の刺客どもは悪名高い『鴉』に違いない。教会での大仕事の前に、近づいてきた怪しい人物を排除しようとした、といったところか。裏の業界では、王家の汚れ役として有名な連中だ。あれだけの統率の取れた腕利き集団だったことにも説明がつく。

王家が女王の新体制になり、『鴉』も今では解体されたという噂だが、事実はあの夜の戦闘による死傷者で、壊滅状態になったと考える方が順当だろう。

予定外の邪魔は入ったものの、刺客である、タクミは結果、任務を成し遂げ、大神官は失脚した。

そして、王家が次に目をつけたのが、冒険者ギルドだと睨んでいる。

ギルドの組織力は国家を上回る。しかも、民衆からの支持は、王家を凌駕するほどだ。表面上は王家とギルドは協力体制にあり、表立った諍いこそないが、国の頂点に座する

者に並ぶ組織など排除したいと考えるのは、為政者として当然だろう。

そこで、王家は先の失態を逆に活かす一計を案じた。

それこそが、この冒険者パーティ『青狼のたてがみ』だ。

嘘は真実を混ぜることで真実味が増すという。偶然の出会いとその後のランク騒動、パーティに入ることと約束したのは真実だろうが、実際に承諾した理由と目的には裏がある。

相手が困っているからなどと、そんなつまらない理由で他人に力を貸す奇特な奴はいない。ただでさえ王家をバックに持ち、生活にも遊ぶ金にも困らない身の上だ。

真意のほどは知れないが、おそらく奴の目的は冒険者ギルドの中核に入り込み、なんらかの事を起こすこと。今は、その準備段階といったところだろう。

『剣聖』が送り込まれてきたことから、冒険者ギルド側も薄々はその正体に勘づいている。虎の子の『剣聖』の手札をこうも立て続けに切るとは、連中もよほど必死と見える。

しかし、仮にも冒険者ギルド側から奴にギルド加入を申し出た手前、獅子身中の虫となり得ようとも、今さら追い出すことはできない。信用第一を掲げるギルドだけに、上層部がそう判断を下すのも、馬鹿らしいが頷ける。

そこで、お目付け役としての『剣聖』だ。これなら、あのプライド高い『剣聖』が、こな取るに足らない弱小パーティに与する理由に足る。

(経緯が判明したとしても、それはまあ、どうでもいいとして……)
そこで、現状に立ち返る。

あくまでも第一の目的は、奴の始末。それは変わらない。
ただし、バックに王家がついているのはどうにもただけでない。

王の交代というアクシデントがあったにせよ、今回の指名依頼が示すように、奴の飼い主が王から女王に移っただけで、王家が依然としてバックにいるという証明にはなった。

奴を殺せば、王家の有する組織力なら必ず足がつく。英雄を殺すのは暗殺者だが、暗殺者を殺すのは組織だ。それが国家規模となれば、いかな強者として逃げられるわけがない。

相手は憎い。恨んでも恨みきれない。これまで培った誇りと自信と尊厳を打ち砕き、あまつさえ生死の境の旅路を贈ってくれた返礼としては、万死でもまだ足りない。

しかし、そのために自らの命を捧げるなど、ごめん被る事態だった。

あくまで、骨の髄まで悔恨を与えて恨みを晴らしたのちに、足蹴にしたまま生きて高笑いをするのが目的だ。自分まで死んではただの心中、元も子もない。

(どうする……諦めるべきか……?)

諦観しかけたことに反吐が込み上げる。

(いや、駄目だ。殺る。絶対に。それは決定事項だったはず……!)

ここで諦めてしまつては、以前の孤高の『影』に戻ることでできやしない。相手を殺

せないどころか、自分を殺してしまう行為に等しい。

イリシヤは自身を奮い立たせ、拳を固く握り締めた。

だが、もうひとつ気弱になる原因に、暗殺の算段すらいまだつかない状況がある。

パーティの連中——特に『剣聖』の目を盗んで何度か仕掛けてみたものの、依然として効果がなかった。

やりすぎて、『剣聖』に正体が露見してもまずい。なにせ、過去に一度、廃屋で命を狙ったことで、明確に敵対してしまっている。ここで、奴まで同時に敵に回すわけにはいかない。

やはり、タクミンが厄介なのは、様々な攻撃を無効化する効果を有した古代遺物——それすら複製できる驚愕のスキルか。

口惜しいが、さすがは召喚英雄といったところか。逆をいうと、それさえどうにか攻略してしまえば、あの素人じみた動きだけに、あっさりと片がつくに違いない。

常にあらゆる攻撃を無効化しているところからすれば、その効果がある古代遺物は、形状としては身につけるのが容易な小型の装飾品型なのだろう。

よほど用心深いのか、風呂に入っている最中でも決して外すことはないようだ。まあ、冒険者にとって命にも等しい希少な古代遺物を湯に浸ける行為自体は桁外れの蛮行だが、そもそもスキルでいくらでも複製できるとあっては、使い捨て感覚なのだろう。当然なが

ら、四六時中、身から離すこともないはず。

こうなると、残る手立てはひとつしかない。むしろ、当初の手段に立ち戻ったというべきか。

闇で着飾る男はいない。仮に用心深くとも、睦言で女が無料と甘く囁けば、いうことを聞かない男はいない。

固有スキルの（完全魅了）が使えると楽だったが、今のアイシャという仮の姿では、正体を晒すという使用条件に見合わないため発動しない。初手で通じなかった以上、この自慢のスキルは完全に封じられたも同然だ。

前回の手痛い失敗からも、安い女では疑われる。舐めてかかると、再び反撃を食らうのはこちらだ。またしても返り討ちなど、それだけは冗談ではない。

ただでさえ『劍聖』やパーティの連中の目もある。面倒だが、しばらくは本物の仲間という心根で行動し、混じりけのない真の信頼関係を築き上げ、その上で気を惹き惚れさせて心酔させるくらいの入念な段取りが必要だろう。

色香で奴を籠絡し、王家すら裏切らせる。逃避行の末に死んだとあれば、王家もそれ以上は追及しまい。

（やつてやる……やつてみせる……）

要は、いつもの潜入調査の依頼となら変わらない。

敵に交りて油断させ、虚を衝き益を得る——『影』の最も得意とする分野である。

室外からドアをノックする音がした。おおかた、あの甘つちよろく温いパーティの連中だろう。

飛び出したメンバーを心配して慰めにでも来た、そんなところか。

まったくもってくだらない理由すぎて、胸糞悪くて反吐が出る……のではあるが、これからしばらくはその同類を装い、仲良くお友達ごっこをして過ごさねばならない。

（さて、言い訳はどうしよう？　ひとりだけ除け者にされていたことにショックを受けたとでもするか。そして、最後にこう加えとくか、「だけど、そんな大事なことを話してくれて嬉しかった。これからも仲間として仲良くしてくださいね」なんてな。けけっ！）



結局、皆さんと話し合った結果、指名依頼を受けることになりました。もとより、王族からのご指名とあれば、一介の冒険者に拒否するという選択肢はまずないそうです。

それ以前に、私が在籍しているせいで押しつけられたような依頼で恐縮だったのですが、意外にも他の皆さんはかなり乗り気です。指名依頼とは冒険者パーティにおける一種のステータスであり、それが王家からともなれば、冒険者としてもかなりの箔がつくそうで

すね。皆さん、向上心に溢あふれていて、感心してしまいます。

書類上はSSランクではありますが、いまだ実績のない『青狼のたてがみ』としては、名に実が追いつける絶好ぜつこうの機会とあり、カレットさんたちからはむしろ感謝されたほどでした。

そして、冒険者だけではなく冒険者ギルドのほうも、国家権力との縁を深められる——平たひらたくいいますと、国に恩を売れる案件はギルドの指針で推奨すいしょうされており、その冒険者が所属するギルド支所の格付けに関わる貢献度こうけんどでも高く評価されているそうです。その点から、ラレント支所を盛り上げたイヤサリーさんからも、おおいに発破はつぱをかけられました。私としては、顔見知りで同じ境遇きんぐうのエイキのことを放っておくわけにもいきませんから、今回すんなりと依頼を受け入れてもらえたのは、渡りに船でありがたいばかりです。

エイキが魔王討伐とうばつのために旅立っていたことは噂うわさで知っていましたが、まさか行方不明などという事態になっていようとは。

『勇者』という存在は、この異世界では並ぶ者なしとされる強者の代名詞だそうです。そもそも、召喚された当時の魔王軍との戦いくさみたいな個人対軍団戦という状況が異常なだけであり、通常戦闘で『勇者』が魔物などに後れを取ることはないと聞いていました。だから、安否あんぴについてすっかり安心しきっていました。

便りが無いのは良い便りとはいいますが、まさに的まとを射いていたのがわかりますね。便り

があつた途端とたんにこれですよ。寝耳に水もいいところです、まったく。

即日のうちに準備を済ませ、私たち『青狼のたてがみ』の一行は、昼過ぎには一路王都を目指すことになりました。

まずは、依頼主——つまりは女王様に、依頼の詳細しじょうを訊ききにかかないといけません。

ここラレントの町を訪れてから、わずか一ヶ月もしないうちに再び王都に舞い戻ることになろうとは、思いも寄りませんでしたね。

今度もまた長い馬車旅ですが、今回はパーティの仲間と一緒ということもありまして、ずいぶんと雰囲気ふんいきも違います。

パーティ自前の専用馬車ですから、すし詰めづみの乗合馬車と違って車内も広々ゆつたりと使えます。六人なら、全員が全身を伸ばして横になれますね。

それに、乗車人数が少ないということは、馬足も速いということです。なにより乗合馬車にありがちな、いくつもの停留所を転々とする道中ではありませんので、距離きょり的にもぐっと短縮たんしゆくできて、前回よりもかなり早い行程になるでしょう。

エイキのことは気がかりですが、なにもできない移動中に焦あせっても仕方ありません。ここは彼を信じ、今は我慢がまんのときですね。気を落ち着けていきましよう。

だからというわけではないのですが、今、私の手には五枚のカードが握にぎられています。なんでも冒険者の心得として、オンオフのスイッチの切り替えが大事だそうです。冒険者

たる者は休めるときには休む、遊ぶときには思いっきり遊ぶもの！とレーネさんに熱く諭され、御者役のカレットッさんを除いた五人で車内で輪になり、先ほどからカードゲームに興じています。

こうして遊んでいることに、エイキに対して申し訳ない気持ちがないわけではありませんが、レーネさんの言に一理あるのもたしかですし、郷に入りては郷に従えということですね、はい。

「だああ〜！ まった負けた〜！」

賭けていた銅貨を放り投げて、レーネさんがごろんと床に転がりました。

私たちが行なっているのは、トランプのポーカークに似たゲームです。

カードの組み合わせで強弱があり、配られたカードの役に自信のある者は、まずはチップを一枚賭けます。この時点で自信のない者は降りられるので、ここで降りた場合は損得なしです。さらに自信のある者はチップを上乗せし、勝負を受ける場合はチップを追加。ただしここで降りてしまうと、最初に賭けたチップは場に残り、手元に返ってきません。後はそれを繰り返して、最終的に降りずに残った者同士でカードを公開し、役が最も強かった者だけが場にあるチップの総取りとなります。

こんな簡単なカードゲームでも、個性が出て出るものですね。

レーネさんは他人の心の機微を読むことには長けているのですが、それ以上に顔や態度に出やすいです。それでいて、ブラフを多用して無謀にも最後までチップを吊り上げるものから、一番負けが込んでいます。

フェレリナさんは逆に堅実派ですね。ブラフはまったく用いずに、少しでも分が悪いと感じたら、多少いい役でもあっさり降りてしまう傾向にあるようです。大勝ちも大負けもせずに、チップの変動がほとんどありません。

アイシャさんは……言い表しにくいのですが、勝敗にはこだわらず、あえて自分の勝ち負けを制限し、場を調整している感があります。私と井芹くんを除いた皆さんの中では年長者ですから、仲間内で角が立たないようにされているのでしょうか。なんとも大人な対応です。

井芹くんは、役が悪いときはあっさりと降りるのですが、いけると感じたらぐいぐい押してくるタイプですね。一度前に出たら、引くことはありません。それでいて、最終勝負で負けたときはすごく悔しがる、極端な負けず嫌いです。それはいいのですが、負けたときに子供の芝居を忘れて素で舌打ちするのには、どうしようかと思いましたよ。

結果、勝敗は上から、井芹くん、アイシャさん、フェレリナさん、私、レーネさんの順となりました。

ドベのレーネさんがチップの銅貨を使い果たして不貞寝をはじめましたので、カードゲームは自然にお開きになりました。

その後は皆さん馬車の中で、思い思いに過ごされています。

井芹くんは壁にもたれかかり読書、アイシヤさんは装備の点検をしています。フェレリナさんは瞑想めいそうしているようです。

私は特にやることはありませんので、とりあえず馬車の窓から外の景色を眺ながめています。「……それにしても、こんなにのんびりしているのでしょうかね？」

普段の馬車旅でしたら、道中さまざまアクシデントも起こるものですが、精霊使いのフェレリナさんが認識なが障害とやらの精霊魔法を馬車に施ほどこしているようで、今の馬車は外から非常に認識しづらい状態にあるそうです。おかげで、馬車は無人の荒野こうやを突き進むのがごく。精霊魔法とは便利なものですね。

「まあ、たしかにこうして移動している間が一番暇ひまだよ。常に外敵を警戒けいがいしていた、馬車買う前には考えられなかった贅ぜい沢な悩みなのかもしれないけど」

「おや。起きていたのですか」

気づけば、レーネさんがごろんと横になったまま、首だけこちらに向けていました。

「さすがに本当に寝ちゃったら、気が抜きすぎだからね。なにがあるかわかんないし」

「そのだらけまくった格好だけでも、十分に気を抜きすぎよ」

レーネさんは片目を開けた瞑想めいそう中のフェレリナさんから、額ひたいをぺしんと叩たたかれていました。

「あ痛。だああってさ……暇なもの暇なんだから、仕方ないじゃんかよお」

しぶしぶレーネさんは起き上がり、床に胡坐あぐらをかいた姿勢から、お尻を支点からだに身体ごと私の真正面まじょうめんに方向転換しました。

「そうそう、そーいやタクミンは、『勇者』にもちろん会ったことあるんだよね？ どんな感じの人？ 背、高い？ やっぱ凛々りんりしい感じの大人でカッコよさげな人？」

いきなり『勇者』の話題が出ましたので、思わず私はちらりとアイシヤさんの様子を窺うかがってしまいました。

先日の私による出自しゅじの暴露ばくろで、アイシヤさんを除け者にして気分を害あせてしまった負い目があります。本人は、気にしてない、教えてもらえて嬉しかった、といってくれましたが、冒険者ギルドから走り去ったあのときの状態からして、そう安直に言葉通りに捉とらえていいものでもないでしょう。

私の視線を感じたようでした、アイシヤさんはナイフを磨みがいていた手を止め、こちらに笑顔を向けました。

「前にもいいましたけど、余計な気遣きづかいは無用ですよ。そもそもアタシ自身、気にしてなかったんですから、本来は謝罪しやざいの必要もなかったことです。それより、アタシもあの英雄様のことなら聞いてみたいですね」

アイシヤさんもまだ若い方ですので、大人の心配しんぱいりですね。

誰かに似ている気がします。そう、気配り上手のイリシャさん。そういえば、名前の語感も似てますね。

「ねえ、タクミンってば。聞いてる?」

「ええ、はいはい。『勇者』——エイキのことでしたね」

エイキとは半年近く前に王城で少し話しただけでしたが、あの日のことは印象深かったですから、よく覚えています。軽口好きなヤンチャで愉快そうな子でしたね。

高校生だったはずですから、レーネさんとは同年代くらいじゃないでしょうか。

「十六歳の活発そうな男の子ですよ。身長は私とフェレリナさんの中間くらいじゃないでしょうか。ノリもよかったですから、レーネさんとは気が合うかもしれませんね」

「ええ? なんだ、だったらガキじゃん。期待して損した」

それはすなわち、自分もそうだと知っていることになると思うのですが……

「やっぱ、頼りがいのある大人の男じゃないとね。身長百八十センチ以上でガタイもよくて渋くて。屈強な戦士! って感じじゃないと」

レーネさんは女性にしても身長が低く、百四十センチ台半ばくらいしかありませんよね。そんなレーネさんが、その理想の人物と仲良さげに腕を組んでいる図を想像しますと……ユーカーリの木にぶら下がっているコアラを彷彿させないでもないですね。もしくは、誘拐犯に連れ去られそうになっている少女とか。犯罪性を感じなくも?」

「ねね、だったらさ、『賢者』はどうなの? 前回の王都防衛の立役者。今も王城に住んでいるんでしょ?」

「ケンジャンですか……」

脳裏に、あの独特なシルエツトが思い浮かびます。

あれも一種ガタイがいいと表現できなくもありませんし、レーネさんの理想にだいぶ沿っていると思わなくも? ふむ。

「年齢はアイシャさんと同じくらいでしょうか。身長は高いですね。おおよそですが、百八十センチちよつとはあるのではないのでしょうか」

「おお〜」

「恰幅もいいですし」

横に。

「理的で」

眼鏡が。

「う〜ん。理想は渋めのムキムキ戦士だけど、賢そうな細マッチョお兄さんも捨てがたいかな……」

レーネさんが頭を悩ませています。

私の頭の中の実像とだいたいイメージに隔たりがあるようですが、ここはケンジャンの名

誉のためにも否定しないほうがいいですよね。



三日ばかりの行程を経て、『青狼のたてがみ』の一行を乗せた馬車は、あつざりと王都カレドサニアに着くことができました。王都を離れてわずかひと月ばかりで感慨を抱くほどでもありませんが、それでも懐かしく感じるものはありますね。

王都に入ってから、私たちはいったん別れて別行動を取るようになりました。

パーティのリーダーであるカレッツさんと当事者の私、そして頑として同行を主張したレーネさんを含めた三人が、王城の女王様のもとへ出向くことになり、フェレリナさんとアイシャさんは馬車に残って荷物番です。

井芹くんは食材調達の名目のもと、単独で王都をぶらつくそうです。まあそれは建前で、冒険者ギルドのカレドサニア支部のほうに顔を出すということでした。今回の件についても、ギルドにいろいろと確認しておきたいことがあるそうです。

賑わう城下町を抜けて、私たち三人は、カレドサニアの王城へとやってきました。

事前に話は通っていたようで、身分証代わりの『青狼のたてがみ』のパーティカードを提示しますと、私たちはすぐさま城内へと通されました。そういえば、正式な手順を踏ん

で入城するのも、何気に初めてでしたね。

出迎えてくれた衛兵さんの先導のもと、厳肅な王城の通路を並んで歩いていきますと、城内が物珍しいのか、レーネさんが後頭部で後ろ手を組んだまま、しきりに周囲をきよろきよろと見回していました。

「こら、レーネ。みつともないだろー!」

小声で窘めるカレッツさんにも、お気楽なレーネさんはどこ吹く風です。

「いいじゃんリーダー、固いこといいっこなしで。こんな王城に入れる機会なんて、そうそうないんだし!」

「そりゃあそうだろうけど……!」

対照的に、カレッツさんはがちがちに緊張しているようです。なにか、手足の動きがぎくしゃくしています。ともすれば、同じ側の手足が同時に出そうになるのを堪えているような。

これから一国の最高権力者に面会しようというのですから、当然なのかもしれませんが。

「さすがに、タクミさんは余裕そうですね……?」

「……ふうむ。そうですね」

いわれてみますと、私ってこの異世界に来てから結構、偉い人ばかりにお会いしてませんかね。

王様然り、女王様然り、大神官様然り、エルフの女王のセブさん然り——騒動に巻き込まれるのに慣れてしまい、そこら辺の感覚も麻痺してしまったのかもしれないね。

「お？ タクミじゃないか！」

「え？」

つい俯いてしまっていた顔を上げますと、通路の向こう側から歩いてくるケンジャンの姿がありました。

さらに増量を重ねたようできて、全体のシルエットがミカンを載せた鏡餅っぽくなっていますね。最後に会ったときから三割増しといったところでしょう。

また城下への買い出しの帰りでしょうか。両手いっぱい袋と、口には串カツを三本ほど咥えています。

「ついこの前、王都を離れる挨拶に来たんじゃなかったっけ。もう戻ってきたのか？ 串カツ食う？」

「いえ、結構です」

ちなみに、いくらなんでもその口に咥えた食べかけの串じゃありませんよね？

「これからちよつと女王様との用事があります。それが終わりましたら、またすぐに出ないといけません」

「そっか。おまえもたいへんだな。じゃあ今度暇ができたなら、僕のところにも顔を出せ

よ？」

「はい、是非にも。それでは、また」

すれ違い際の声かけ程度で、ケンジャンはそのまま去っていきました。離宮の自室のほうに戻ったのでしようね。

「なに、今の人。タクミんの知り合い？」

背中隠れていたレーネさんが顔を覗かせました。

「ええ、まあ。友達ですな」

そして『賢者』です。

「これでもか！ ってくらい、すんごい太ってたねえ。黒っぽい服着てたから、一瞬、オークかなにかの魔物かと思って斬りかかっちゃうとこだったよ。にしし」

「……レーネ。いくらなんでも、タクミさんの友人に失礼だろ」

「そっか、ごめんごめん。でも、これだけ広そうな王城で友達と会っちゃうくらいだから、案外『賢者』様ともばつたりなんてこともあるかもね！ そのときはちゃんと紹介してよね、タクミン？」

「……ええ。ははは」

すみません、ケンジャン。今の状況で真実を語る勇気のない私を許してください。理想は理想のままですつとしておきましょう。

そうこうしている内に、目的の場所に着いたようでした。てっきり、いつもの謁見の間に連れていかれるのかと思いましたが、案内されたのは別の一室でした。雰囲気からして、貴賓室なのかもしれません。

出入口前で待機していた別の衛兵さんに武器の類を渡してから、無人の室内に導かれました。

「こちらにて、しばしお待ちくださいませ。私めはこれで失礼いたします」

案内役だった衛兵さんが一礼し、きびきびとした動作で退室していきます。

部屋の中央に豪華な応接セットが用意してありましたので、とりあえずそのソファアに、三人並んで座って待つことにしました。

ソファアは高級そうな見た目通りふかかな上で、しかもゆっくり三人で座っても充分に余裕があるくらいに大型の品ですね。

「うっわ、なにこれなにこれ!? すっごい沈むんだけど、あはは！ ほらほら、見て見て〜!」

興奮したレーネさんが、ソファアに正座した格好で上下に跳ねています。

「だから、はしゃぐなって！ こんなところを見られでもしたら——死罪になるかもしれないんだぞ!」

カレットさんが真っ青になりながら、動揺して中腰のままワタワタしていました。

いくらなんでもそれは飛躍しすぎかと。レーネさんは無邪気すぎですが、カレットさんは緊張しすぎですね。

メタボな元王様と違って、ベアトリー女王は割と気さくなお方です。良識もあり、他人の話に耳を傾ける寛容さもあります。王族に不敬と断じられるほどの無体を働いたのでしたらともかく、この程度のお茶目に目くじらを立てるほど、狭量な方でもありませんね。以前の私の日本帰還騒動で、誤って謁見の間に乱入してしまった際にも、笑って許してくれました。それどころか、そのまま一緒にお昼をともししたほどです。

女王様は長年病床にあつたせいとか好奇心が旺盛な方です、そのときも私を持ち込むことになった異世界の食事に、たいへん興味を持たれていました。気品あふれる荘厳な衣裳を纏った一国の女王様が、タイムセールで半額になったお寿司や惣菜を箸で突いているさまは、かなりシユールではありませんが。

ただ世間一般には、快気と同時に、十年近くも執政を任せていた王配を追放して王座に返り咲いた女王様ですから、真相を知らない方々からしますと、無慈悲な統治者に思えても仕方がないのかもしれないですね。

「皆様方、お待たせいたしました」

部屋の奥にある別の扉から、その女王様の颯爽としたご登場です。

精力的に執務をこなされていると風の噂で聞いていましたが、相変わらずお元気そうですね。

声に弾かれるように、カレッツさんがソファアを蹴って立ち上がっていました。

「も——申し遅れましたが！ 『青狼のたてがみ』のリーダーを務めさせていただきます、カレッツと申しばふゆー！ こによたびはごそんぎゃんびたば、たわま、まびして……」

残念。申し遅れたところか、唐突感のある挨拶だった上、後半は噛みまくりでグダグダです。

カレッツさんが顔色を失くしたまま、硬直して微動だにしていません。また、死罪とかが頭を過っていそうですね。

(やれやれ。仕方ありませんね……)

レーネさんと目配せしてから揃って起立し、紹介のバトンを引き継ぐことにしました。

「こちらは、冒険者バーティ『青狼のたてがみ』のリーダーのカレッツさんです。そして、こちらが同じくメンバーのレーネさんです」

「……カレッツです……」

「レーネと申します。この度は、女王陛下に拝謁する栄誉を賜りましたこと、誠に光榮の至りと存じます」

レーネさんが落ち着いた口調とともに、手を胸と腰の後ろに添え、片膝を落として畏まりました。余裕さえ感じられる堂々とした所作で、実に堂に入っています。

はて、先ほどまでソファアで飛び跳ねて遊んでいた方はどこに行ったのでしょうか。見事な猫の重ね被りっぷりです。

そういえば、レーネさんはもともと商家の娘さんと聞きました。もしか、ラミルドさんの営むアバントス商会のような大きい商家さん出身で、幼き頃に身につけた礼節とかでしょうか。どちらにせよ、普段をよく知っているだけに驚きですね。

ですが、女王様からは見えない後ろ手でVサインをしたり、意気消沈するカレッツさんをかからかって頭を伏せながら密かにどや顔を見せつけているのは、いつものレーネさんですね。なぜか、安心しました。

「妾はカレドサニア王国が女王ベアトリ・オブ・カレドサニア。此度はご足労をおかけしました。そう気負わず、構いませんので、どうぞ楽にされてください」

「これはどうも。では、お言葉に甘えまして。ささ、ふたりとも」

あらためてソファアを勧められたので、皆で做うように腰を下ろしました。

私たちが座るのを見届けてから、女王様が応接テーブルを挟んだ対面ソファアの中央に優雅に腰かけます。

専属の護衛の方でしょうか、略式鎧姿の面差しに似た若い男女ふたりが、女王様の背後

立ち読みサンプル はここまで